

四季成り性イチゴオリジナル新品種「サマードロップ」(仮称)

農業・園芸総合研究所

1 取り上げた理由

イチゴは夏秋期でも業務用（ケーキ）需要が多く、そのほとんどは輸入イチゴが利用されている。実需者の国内産イチゴに対する要望は極めて高く、寒冷地においては夏期の園芸品目として注目されている。

そこで、本県の気象条件を活かし、イチゴ端境期の需要をターゲットとした高品質で安定した四季成り性を有した「サマードロップ」（仮称）を育成したので普及情報とする。

2 普及情報

1) 育成経過

四季成り性イチゴ新品種「サマードロップ」は、平成14年度に農業・園芸総合研究所において「みよし」を子房親、「Rosalinda」の実生苗株を花粉親とし交配、得られた1011株の実生苗から品質の優れる1系統「14-8-3」を選抜し、以後増殖を行いながら夏秋期における養液栽培、雨よけ土耕栽培において特性調査を行い育成された品種である(表1, 写真1, 2)。

2) 特性の概要

a 「サマードロップ」は、夏期高温期でも連続して出蕾し、草勢が強い。果房着果数は17.8果で、平均1果重は7.2gである。夏秋どりをターゲットとした7～10月の株当たり商品果収量は196gで、収量・商品果数は「サマーキャンディ」よりやや多い(表1, 図1)。

b 果実糖度は8.0～11.0%、酸度は0.71～1.02%（滴定酸度クエン酸換算値）で糖酸比が高く食味は良い。果実硬度は硬く、果形は円錐形、果皮色は淡橙～赤で果実内部の空洞は無く、果実揃いも良い。ランナーの発生も多く増殖も容易である。(図2, 表2)。

3) 対象地域等

山間高冷地。

3 利活用の留意点

- 1) 「サマードロップ」は種苗登録出願中である（受理番号第 号）。
- 2) ランナーの発生が多く、子苗も十分確保できることから増殖性は良好である。
- 3) 標準的な栽培として、苗は前年秋に採苗し、露地で越冬する。夏秋どりを目的とするため（7～10月どり）定植は4月中旬～5月下旬、定植後1ヶ月程度は出蕾する花房を逐次摘みとり、株養成を図る。
- 4) 施肥は、土耕栽培では窒素分量で1.5kg/aを緩効性肥料で施用する。養液栽培では0.4～0.6 ds/mで管理する。

(問い合わせ先：農業・園芸総合研究所園芸栽培部 電話022-383-8132)

4 背景となった主要な試験研究

- 1) 研究課題名及び研究期間 園芸作物のオリジナル品種育成 平成11～平成20年度
- 2) 参考データ

表1 新品种「サマードロップ」の形質特性

区分	形質	「サマードロップ」特性値 (標準品種と比較して)	標準品種 「ペチカ」	対照品種 「サマーキャンディ」
植物体	草姿	立性	中間	中間
	草勢	やや強	中	中
	草丈	やや高	中	中
	分けつの多少	少	やや多	中
葉	葉の光沢	やや強	やや弱	強
	葉の厚さ	厚	中	中
	葉柄の長さ	中	中	中
花・花房	花の色	白	白	白
	花房あたりの花数	中	中	中
	花柄の長さ	中	やや細	中
果実	果実の大きさ	やや小	中	中
	果実の色	淡紅	赤	鮮赤
	果実の光沢	中	中	やや良
	香り	中	中	中
	果肉の色	白	白	白
	果実の空洞	無	無～極小	無
ランナー	ランナー発生の多少	多	少	少

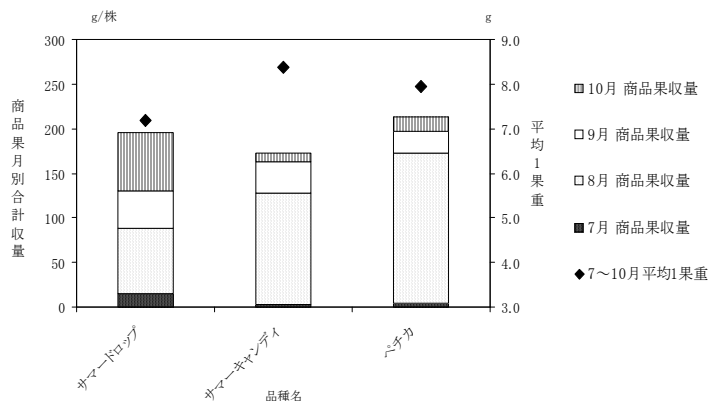


図1 土耕栽培における「サマードロップ」7～10月の株当たり月別合計商品果収量と商品果平均1果重（平成20年度）

写真1 「サマードロップ」の着果状況（土耕栽培）

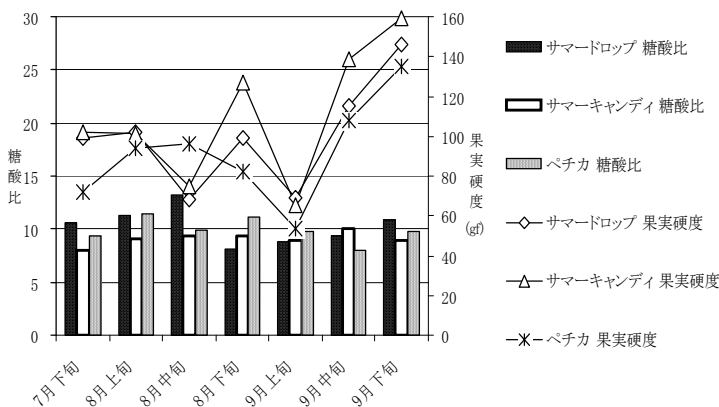


表2 「サマードロップ」の累計ランナー発生本数及び採苗子苗数

(平成20年度)		
系統・品種名	累計ランナー数(本)	採苗子苗数(本)
サマードロップ	26.5	28.3
サマーキャンディ	21.6	16.6

注) 累計ランナー数は2008年5月30日までに発生したランナー数。
採苗子苗数は2008年9月12日に採苗した本数。本葉1.5枚以上の子苗。

図2 「サマードロップ」の7月下旬～9月下旬収穫果実における果実糖酸比と果実硬度の推移（平成20年度）

- 3) 発表論文等 平成21年度園芸学会秋季大会発表予定。

